



警告のニューズレター「角笛」

発行日：2014年2月発行（第46号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ「空想話」 エレミヤ

◎証「目方の不足を満たす」 E3

◎お知らせコーナー 「新刊本の紹介」

< 巻頭メッセージ >

「空想話」 by エレミヤ

本日は空想話というタイトルでテモテ書から見ていきたい、と思います。

“1テモテ4:7 俗悪な、年寄り女がするような空想話を避けなさい。むしろ、敬虔のために自分を鍛練しなさい。”

< 終末の教会には空想話が起きてくる >

聖書は何度かにわたって、教会の中に空想話が起きてくること、そのような空想話に惑わされないことを警告しています。上記テキストはその一つです。ここから、教会に入ってくる空想話に関する警告を見ていきましょう。

上記テキストには、教会に入ってくる空想話とともに「年寄り女（KJVでは年寄り妻）」について書かれています。このことの意味合いを考えてみましょう。

聖書はたとえに満ちた書であり、主はたとえを理解できない弟子を「このたとえを理解できないのですか」と叱責されました。（マルコ4:13）ですので、たとえを理解することは主の弟子を目指す人々には必要

なことです。それでは、年寄り女(妻)のたとえの意味合いは何でしょうか？

エペソ書に結婚に関して、この奥義は偉大である、結婚はキリストと教会をさすと書かれているように、妻は教会のたとえです。そして、年寄り妻は、初期の教会ではなく、教会時代の終わり、終末の教会をさすたとえと理解できます。

人間の世界でも最初は初々しかった妻も年とともにずぶとくなり、素直に旦那の言うことなどきかなくなる、などということがあられるかもしれません。

同じように残念ながら、終末の日の教会も素直に夫であるキリストのことばに従う、というよりは、勝手な行動を行うようになる。教会はこの世についた俗悪なものとなり、ついには、聖書や、キリストのことばとは、無関係な空想話を語るようになる、そのようなことがたとえで語られているのです。

このように理解できるのですが現実はどうでしょうか？残念ながらこのことは事実であり、現在の教会はもう夫であり、「ことばは神である」といわれたキリストのことば、聖書のことばに対して、素直には従わなくなっています。勝手な妄想話、空想話を語るようになっています。たとえば、カソリックは、聖書のことばを神話扱いするかのよう、「進化論は科学的であり否定できない」と語っています。

また、神のことばに逆らって「地獄はない」と公言しています。しかし、これらのカソリックのことばは、真理からかけ離れた空想話なのです。まさしく、年寄り妻は俗悪な空想話に入っていることがわかります。

私たちは以前、以下のことばから、終末の日には、悪霊の教理がキリスト教会を席卷することを学びましたが、その悪霊の教理とは具体的には、空想話を通してやってくることを知りました。

“1テモテ4:1 しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。”

＜艱難の前に教会が携え挙げられるという空想話＞

地獄は存在していないなどという空想話が本当の話に思えてしまうカソリックとは、まことに空想話やら、悪霊の教理が席卷している教会です。

しかし、このことは、ひとりカソリックだけの問題ではなく、同じくプロテスタントも負けずに空想話やら、悪霊の教理に席卷されていることを思い出しましょう。

数ある空想話の中でもその際たるものは、プロテスタントに蔓延する教理、艱難時代の前に教会が携え挙げられるといういわゆる艱難前携挙説(2段階携挙説ともいう)です。

今の時代の教会には当たり前のように受け入れられているこの教理は、教会時代の終わり頃、19世紀に教会に忍び込むようにして入ってきた教えであり、それまでは教会で唱えられたことのない新しい教え、新しい空想話なのです。

歴代の聖徒達、ルターもウエスレーもこんな教えには言及していません。具体的には19世紀にイギリス、プリマスブラザレンのJ.N. ダービーが、アメリカで講演して広めた教えなのです。

彼は、霊媒女性マーガレット・マクドナルドの見た「艱難時代の前にキリストが来臨して聖徒を天に引き上げる」との幻に基づき、この話を広めました。繰り返

しますが、霊媒の見た幻がこの教理の基本であり、キリストのみことばが基本ではないのです。

＜空想話は聖書の教えと矛盾する＞

聖書の教えから出てきた教えではないので、当然、艱難の前に挙げられるだの、キリストが2回にわたって再臨するだのの教えは、多くの聖書のみことばと矛盾し、衝突します。

聖書は以下の様に何度も何度も繰り返し、終末の日に正しいクリスチャンは、「艱難に遭遇する」「艱難を経過する」ことを述べ、艱難の前に挙げられるなどの空想話は全く語っていません。

(キリストは起こらない艱難を語った嘘つきか?)

“マタイ24:3 イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」

24:4 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。」



レフトビハインドは終末の空想話

24:5 わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。

24:6 また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たのではありません。

24:7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。

24:8 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。

24:9 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに合わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。“

この終末に関する記事で主は我々に対して、「そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに合わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。」として、我々が、その日、艱難に会ったり、全ての人から憎まれるような苦難に会うことを警告しています。もし、艱難前携挙説が正しいのなら、キリストは決して起きない苦難に関して語ったオオカミ少年か、嘘つきということになってしまいます。しかし、そのようなはずがありません。

(偽預言者イエス・キリスト?)

“マタイ 24:10 また、そのときは、人々がだぜいつまづき、互いに裏切り、憎み合います。

24:11 また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。

24:12 不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。“

主は上記箇所、その日、人々が「だぜいつまづき、互いに裏切り、憎み合います。」と述べました。

艱難時代の困難の中で、多くのクリスチャンが信仰につまづき、また、逮捕、投獄の恐怖の中で、互いに裏切ったり、憎みあう日が到来することを預言しているのです。

しかし、教会が艱難時代の前に挙げられるなら、これらのどの警告も実際には起きないことになり、結果、イエス・キリストという人は起きもしない預言を語った偽預言者ということになります。そのようなはずがありません。

(キリストは艱難時代を最後まで耐え忍ぶことを語った)

主は艱難の前に挙げられることなど全く言及せず、しかし、艱難時代を最後まで耐え忍ぶものは救われることを語りました。以下の通りです。

“マタイ24:13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。”

ですので、艱難の前に挙げられると主張することは、主の語られた艱難時代を最後まで耐え忍べとのことばに真っ向から反論していることになります。

そのようなわけで、結論として、この艱難の前に挙げられるとの教理は、全く聖書のことば、キリストのことばと矛盾する荒唐無稽な空想話であることがわかるのです。ですから、この教えこそ、まさにテモテ書のいう終末の空想話であり、また、まさに終末の悪霊の教理であることがわかるのです。

<耳ざわりの良い空想話は蔓延する>

しかし、一体全体何故、このような聖書と全く正反対のヨタ話、空想話が教会を席卷するようになったのでしょうか？このことに関してパウロは以下の様に述べています。

“2テモテ 4:3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず(健全な教えに耐えられなくなり:KJV)、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、

4:4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。”

ここで語られていることは、終末の日にクリスチャンがもう聖書の正しい、健全な、まっすぐな教理や、教えを聞くことには、耐えられなくなり、結果、そのような教えには耳を傾けなくなる。逆に耳障りの良い、空想話には、大いに耳を傾けるようになる、そのような時代が来るとの預言です。

このことばは、今、私たちの目の前で成就しています。クリスチャンは決して艱難に会わないという、耳障りの良い空想話、艱難前携挙説はクリスチャンの間で大人気になり、各教会でも大いに用いられているのです。

<耳ざわりの良い終末教理は蔓延する>

上記ことば、「自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め」とのことばのように、終末の時代の特徴は、人々の耳に都合の良い教理、教師は多くのクリスチャンから大歓迎され、広がっていく。逆に耳に痛い真理は広がらない、という特徴があります。

結果、終末の日に人気を博す終末教理には特

徴があり、その特徴は、「耳に優しい」という特徴なのです。

アメリカを始めとして何千万部も売れた終末本であるハル・リンゼイの本や、レフト・ビハインドなどは、まさにその「クリスチャンの耳にやさしい」という特徴をかねそろえています。これらの本の特徴は、以下の通りです。

- * 艱難前携挙説→クリスチャンは艱難に会わないという耳障りの良い教え
- * 艱難時代に災いに会うのはユダヤ人、クリスチャンは災いに会わないという耳障りの良い教え
- * 聖書が明確に警告している終末の日の教会の背教やその日多くのクリスチャンがふるわれ、よりわけられ、反キリストを拝するようになる、などとの耳に痛い真理は語らない。

この様にこれらの本は耳に痛い聖書の真理から、我々を遠ざけ、ありもしない空想話、ファンタジーを語っているのです。結果、これらのインチキ本は、ベストセラーになっているのです。

まさに、上記聖書箇所、「自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め」とのことばは、これらの本において実現しています。

<終末の預言は空想話でなく、みことばに従って成就する>

しかし、いくらこれらのインチキ本がベストセラーになろうと、なるまいと、終末の日のできごとは、これらの空想話や、背教クリスチャンの妄想に従って起こるわけではありません。逆にそれは、真理のみことばに基づいて成就することを知しましょう。

そして、もう一つのことを知らなければなりま

せん。それは、その日多くのクリスチャンは、耳の痛い真理からは離れ去り、逆に空想話には、大いに耳を傾けるようになることをです。

かつての日、主イエスの時もそうでした。厳しい真理のことばに対しては、人々は耳を傾けず、しかし、耳ざわりの良い話や、空想話には耳を傾けていたのです。当時の教師であるパリサイ人も律法学者も、真理を語るより、耳にやさしいことばのみ語っていたようです。以下のように書かれています。

“ルカ11:42 だが、忌まわしいものだ。パリサイ人。あなたがたは、はっか、うん香、あらゆる野菜などの十分の一を納めているが、公義と神への愛とはなおざりにしています。これこそ、実行しなければならない事がらです。ただし他のほうも、なおざりにしてはいけません。”

ここで、書かれている「公義」とは、K J V では、裁きと書かれています。要するに当時のパリサイ人は、民衆の望みや要望に合わせて耳ざわりの良いことを語り、来るべき裁きや、神の裁きに関しては語っていなかったことがわかるのです。

群衆もまた、耳ざわりの良いことばを望んでいたのでしょう。したがって、彼らには、以下の主のことばのような、厳しい未来の裁きを語る真理のことばは歓迎されていなかったようです。

“ルカ19:41 エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、

19:42 言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。

19:43 やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、

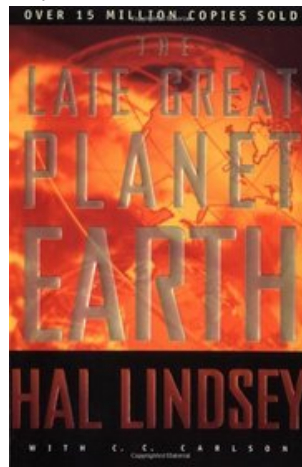
19:44 そしておまえとそこの中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。”

人々はこのような真理を語る主のことばに耐えられず、主を異端者として捕らえ、十字架で殺し、排除しました。しかし、実際の未来はどのように実現したのでしょうか？

キリストが十字架につけられた後、40年後の西暦70年にこの主のことばは成就し、エルサレムは、ローマ軍に攻められ、包囲され、その中の人々は最後の一人まで殺されてしまったのです。民衆のご機嫌取りのため、公義（裁き）について語らず、耳ざわりの良いことばを並びたてていたパリサイ人達のことばやら、空想話は実現しませんでした。逆に、厳しいがしかし、真理を語る主のことばのみが未来において成就したのです。このことは、終末においても話は同じであることを知しましょう。その日、艱難前携拳説などの耳ざわりが良い空想話が成就することは決してないでしょう。逆に主のいわれた、真理のことばのみ成就するようになります。主は以下の様に前もって明確に艱難前に挙げられるとの教えを拒絶し、否定しました。

“ヨハネ 17:15 彼らをこの世から取り去ってくださるようというのではなく、悪い者から守ってくださるようをお願いします。”

すなわち主は彼等、主の弟子を「この世から取り去る」という艱難前携拳説ではなく、艱難を経過するがしかし、「悪い者から守ってくださるよう」語られたのです。主が語りも主張もしなかった偽りを述べるべきではありません。一以上一



空想話を述べたハル・リンゼイの本

以前から主から示されていたことがありました。それは何か？と言うと、「主の言われているレベルでの従い」ということです。そのことについて、先日、正確には昨年2013年12月1日の午前の礼拝のメッセージでそういったことを主が後押ししているかな？と思いましたので、証をしたいと思います。

その前に、私がなぜ、主から示しを受けたように思ったか？についてですが、それは聖書の記述を通してです。突然ですが、聖書の中で、「神殿」ということばが出てくるのを御存知でしょうか？ちなみに旧約聖書の中の所々では「神殿」の仕様書について書かれています。すでに聖書に詳しい皆さまなら御存知だと思いますが、柱や部屋の寸法等について記されています。そして「神殿」ではありませんが、「箱舟」においてもそのことが適用されています。かの有名なノアの箱舟の話です。ノアが箱舟を造る際に、神さまは材料をはじめ、箱舟の高さや幅、長さ等をノアに指図しました。参考までにみことばを見てみてください。

参照 創世記 6:14-16

6:14 あなたは自分のために、ゴフェルの木の箱舟を造りなさい。箱舟に部屋を作り、内と外とを木のやいで塗りなさい。

6:15 それを次のようにして造りなさい。箱舟の長さは三百キュビト。その幅は五十キュビト。その高さは三十キュビト。

6:16 箱舟に天窓を作り、上部から一キュビト以内にそれを仕上げなさい。また、箱舟の戸口をその側面に設け、一階と二階と三階にそれを作りなさい。

6:17 わたしは今、いのちの息あるすべての肉なるものを、天の下から滅ぼすために、地上の大水、大洪水を起こそうとしている。地上のすべてのものは死に絶えなければならない。

上記17節にありますように、たしかにノアとその家族は、大洪水の滅びから免れるための「箱舟」を用意しました。そして実際に「箱舟」によって、ノアの家族は大洪水の災いから守られました。そう、ノアたちが助かったのは、「箱舟」があり、その中に留まったからです。そして聖書には特別書かれてはいませんが、神さまの示しの通りに「箱舟」を造り、そしてその中に留まったので、大洪水の難から逃れることができたのです。このことは、旧約時代に起きたことですが、しかし、ノアの洪水の話は、新約時代の終わりを生きる私たちへの教訓でもあります。たしかに神は、「**大洪水によって滅ぼさない**」とされていますので、ノアの時に起きた大洪水は起きないでしょう。でも、第二

ペテロの手紙には、このように書かれています。「しかし、**今の天と地は、同じことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。**」と。その前の節には、「**次のように言うでしょう。『キリストの来臨の約束はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。』**こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、**当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。**」とあります。「火」や「水」は、霊的な事柄を示すとえです。そしてこれらのものはいずれも、「悪い霊」のことを指します。そうなんです、たしかに当時「水」によってノアとその家族以外の人たちは滅んだのですが、しかしこのことには第二義的な意味合いも含んでいて、「悪霊」の洪水によって滅ぼされたとも言われているのです。そして「**火に焼かれるため**」と書かれているように、同じことが終末にも再現すると思われます。表現は異なりますが、ここで使われている「水」とか「火」は、全く同じことを指しているのでは？と思います。なぜかと言うと、「滅び」ということばが両者共に使われているからです。説明が大分長くなりましたが、終末、今度は「火」による滅びが来るのなら、私たちは滅びから免れられるように、それこそノアのように備えをしなれば？と思うのですが、いかがでしょうか？「天と地」と書かれているので、もちろん目に見える天体が滅ぼされるということも実現するとは思いますが、しかし聖書の裏の面、すなわちたとえの意味合いである「**霊的に滅ぶ**」ということもきちんととらえなければいけないと思います。また、霊的に滅ぶなら、恐らく天の御国に入れないと思うのですが、いかがでしょうか？かつての大洪水において備えをしたノアの家族は命が助かりました。これは天の御国を受け継ぐパターンです。しかし、備えをしなかった人たちはどうなったか？と言うと、滅んでしまいました。滅んだということは、恐らく御国を相続しなかったパターンだと思います。そして、どのように備えるのか？がとても大事なのでは、と思います。それが本日のテーマにも掲げましたように、「目方を満たす」すなわち「主の言われているレベル」の神殿、

つまり個々におけるクリスチャンの「霊の宮」もっと分かりやすく言うなら、キリストが住まわれる「聖霊の宮」を建て上げていくのです。それがそのまま「備え」につながるのです。そしてそのことはまさしく、ノアが造った「箱舟」に通じるのです。その際に、闇雲に築いてもあまり意味が無いと思います。箱舟や神殿を造る際に、主が指図されたように、私たちが主が指図される通りに、分かりやすく言うと、聖書のみことばが語っている通りに霊的な土台を築き上げていかなければいけないのです。みことばに「**手足が長すぎても、短かすぎてもいけない**」というようなことが書かれていますように、みことば以上、みことば以下にならないように、きちんと主が言われたところに留まった歩みをし続けていく中で、個々のクリスチャンにおける神の宮、いわば「神殿」が建て上げられていくのだと思います。そうするなら、ノアやノアの家族のように、「**火のさばき**」すなわち「**滅び**」から免れられるのです。ただし、ノアの時もそうであったように・・・ノアの時代にも多くの人々(神を信じる人々、今で言うクリスチャン)はいましたが、助かったのは、ノアを含めてたった8人でした。ゆえに終末においても、実際の人数はともかく、「**滅び**」から逃れるというのは、とても例外的なものではないか？と思います。それこそ12月1日に、「目方が足りない」ということをダニエル書5章の記述からエレミヤ牧師がメッセージをされていて・・・紙面の関係上、今は詳細については触れませんが、要するに、神さまの言われているレベルに達していない人は人数にカウントされない、そしてカウントされないなら、いくらクリスチャンと称していても、天の御国に入らない可能性がある、ということを言われているのでは？と思います。また、このことは、「**命に至る門は小さく、その道は狭く、見出す者はまれ**」というみことばにも通じるのでは？と思います。

ですから私たちは神さまの言われている「はかり」に合うような歩みをして、その時々にあって、神さまから「よし！これなら大丈夫！」という風に見なされたいと思います。ダニエルの時代のベルシャツアル王の時に、バビロンは、はかりで量られて、目方が足りないと言われて、その後滅んでしまったことが書かれています。これは今の時代の私たちと無関係な事柄ではないと思います。人前はともかく、しかし、神さまの目から見て、目方が足りないと判断されてしまった時に、滅んでしまうという概念については、よくよく理解しておきたいと思います。

それでは最後に、「目方の不足」を満たす歩みに関

して、私なりに示されたことや実践させていただいていることについて話したいと思います。基本は、いつも申し上げるように、「祈り」と「聖書通読」です。それにプラスして、御心を行うことを常に祈り求めていることです。私自身およばずながら志していても、敵(サタン)にやられたり、別の方向に向かっているなんてことは度々あるので、このことも大事だと思われま。そして、神さまの言われる方向に沿って歩いていこう！という思いを持ち続けていく中で、多少の紆余曲折はあったとしても、何とか神さまの助けによってポイントの歩みに少しずつでも入らせていただいているのでは？と思っています。

また、悔い改めるべき点や不足している点を示していただくためのお祈りを日々、捧げるようにしています。そうすると実際に神さまが色々な方法を通して、不足の部分や見落とししていることや悔い改めるべきことを教えてくださいます。時としてひよんなことも示されます。他のクリスチャンはできているのに、場合によっては神さまを知らない未信者の人でもそういうミスはあまりしないようなこととかが示される場合もあります。そしてごくごく基本的なこともできていない、知らなかったなんていうことまで、神さまはとても親切に、また、懇切丁寧に示してくださいます。また、それに関して祈っていくときに、どうしたら良いかということまで教えてくださいます。示された時は、「ああ、こんなことも自分ではできていないんだ、何も分かっていないんだなあ」とショックを受けたり、恥ずかしい思いになったりもしますが、でも、聖霊にあって、その都度きちんと悔い改めていくときに、いずれも益をもたらすものとなっています。そんな時に、神さまの憐れみと愛を痛切に感じます。「滅びてしまうことのないように」という神さまの配慮は本当にありがたいなあと思われま。なので、罪を示していただくなんていうことも、とてもとても大事なことなのでは？と思います。

神さまの目から見ると、まだまだ「不足」だらけなのかも知れませんが、あるいは聖書に書かれているように、「**知らなければならないほどのことも知らない**」のかも知れませんが、これからもそういったスタンスで歩いていけたらなあと思っています。神さまから何らかの形で示しを受けただちに悔い改めて「不足」を満たす、そういったことを繰り返していきたいと思ひます。そうしていく中で少しずつでも主の目になつた「神殿」に築き上げられ、その延長線上において「火」による滅びから何とか免れて、御国へ招待されるにふさわしい者とされていきたいと思ひます。もちろ

んこういうことばが全ての人に受け入れられるかどうかは分かりませんが、参考までに証をさせていただきました。もし、御心を感じましたら、ぜひ実践してみてください。

いつも大切なことを語ってくださる神さまに栄光と誉れがありますように。

<お知らせコーナー>



- ◆神により永続を約束され、万世一系が決して途絶えないことを約束されたダビデ王朝は、400年の歴史の後、バビロン捕囚を契機に歴史の闇に消え、その行方はようと知れない。
- ◆全能の神、聖書の神の堅い約束、「ダビデには、イスラエルの家の王座に着く人が絶えることはない。」との約束は破られ、万世一系は、果たして途絶えてしまうのか？
- ◆バビロン捕囚により、ダビデ王朝が行方不明となったのは、今から2600年ほど前のことである。
- ◆その頃、東の島国において、万世一系の王朝が誕生する。
- ◆この王朝、皇紀2600年を誇る万世一系の天皇家こそ、ダビデ王朝の正当な後継者ではないのか？
- ◆人種、言語、文化、習慣、歴史、あらゆる面において、天皇家とダビデ王朝には、類似性がある

エレミヤの新刊。「天皇家は万世一系のダビデ王朝の末裔である！」

定価：1500円+消費税。12月1日発売。

ご注文の方は以下まで、連絡下さい。

警告の角笛出版： fax: 020-4623-5255, メール truth216@nifty.com